

日蓮大聖人御書全集

かしやくほうぼうめつざいしよう

呵責謗法滅罪抄

新版

1529

ʃ

1539

かしやくほうぼうめつざいしょう

呵責謗法滅罪抄

文永 10年(’73) 52歳 (四条金吾)

おんふみくわ うけたまわ そうろう
御文委しく 承り候。

ほけきょう おん 故 いぜん いづのくに なが
法華経の御ゆえに已前に伊豆国に流され候いしも、こう

もう い そらら くち ひと ひと こころ よろこ
申せば謙らぬ口と人はおぼすべけれども、心ばかりは悦

び入つて候いき。無始より已来、法華経の御ゆえに、實に

ても虚事にても科に当たるならば、いかでか、かかるつたな

ぼんぶ う そららう いったん おん
き凡夫とは生まれ候べき。一端はわびしきようなれども、

ほけきょう おん
法華経の御ためなればうれしと思ひ候いしに、少し先生

すこ せんじょう

つみ き

おも

むし

このかた

じゅうあく

の罪は消えぬらんと思ひしかども、無始より已來の十惡・

しじゅう ろくじゅう はちじゅう じゅうじゅう ごむけん ひぼうしようほう いつせんだい
四重・六重・八重・十重・五無間・誹謗正法・一闡提の

しゅじゅ じゅうざい たいせん たか たいかい ふか そうろう
種々の重罪、大山より高く大海より深くこそ候らめ。

ごぎやくざい もう いちぎやく つく いつこう むけん か かん
五逆罪と申すは、一逆を造る、なお一劫、無間の果を感じ
ず。一劫と申すは、人寿八万歳より百年に一つを減じ、か

くのごとく乃至十歳に成りぬ。また十歳より百年に一つを
くわ しだい ま はちまんぞう いつこう もう おや ころ
加うれば、次第に増して八万歳になるを一劫と申す。親を殺

もの ほどむけんじごく お ひま だいく う
す者、これ程無間地獄に墮ちて、隙もなく大苦を受くるな
り。法華經誹謗の者は、心には思わざれども、色にも嫉み、

ほけきようひばう もの こころ おも しき そね

たわむ

そし

きょうう

ほけきょうう

な

戯れにも誓るほどならば、經にてなけれども法華經に名
を寄せたる人を輕しめぬれば、上の一劫を重ねて無数劫、
無間地獄に墮ち候と見えて候。不輕菩薩を罵り打ちし
人は、始めこそさありしかども、後には信伏隨従して不輕
菩薩を仰ぎ尊ぶこと、諸天の帝釈を敬い我らが日月を畏
るるがごとくせしかども、始め誓りし大重罪消えかねて、
千劫大阿鼻地獄に入つて、二百億劫、三宝に捨てられ奉り
たりき。

五逆と謗法とを病に対すれば、五逆は霍乱のごとくして
ござらく ほうぼう やまい たい ござらく かくらん

きゅう

こと

ほうぼう

びやくらいびょう

はじ

ゆる

急に事を切る。謗法は白癩病のごとし。始めは緩やかに、

のちぜんぜん

だいじ

ほうぼう

もの

おお

むけんじごく

しよう

後漸々に大事なり。謗法の者は、多くは無間地獄に生じ、

すこ ろくどう しょう う

にんげん しよう とき

ひんぐ げせんとう

ひんぐ げせんとう

げせんとう

少しほ六道に生を受く。人間に生ずる時は、貧窮・下賤等、

びやくらいびょうとう み

にちれん

ほけきょう

みようきょう

白癩病等と見えたり。日蓮は法華経の明鏡をもつて

じしん ひ む

曇

かこ

ほうぼう

自身に引き向かえたるに、すべてくもりなし。過去の謗法の

わ み うたが

つみ

こんじょう

け

我が身にあること疑いなし。この罪を今生に消さずば、

みらい

み

じごく

く

まねか

か

こおんのん

じゅうさい

未来いかでか地獄の苦をば免るべき。過去遠々の重罪を

みなあつ こんじょう しようめつ

みらい

か

こおんのん

じゅうさい

だいく

ばいかにしてか皆集めて今生に消滅して、未來の大苦を

まねか

かんが

とうせい

とき

あ

ほうぼう

ひとびとくにぐに

免れんと勘えしに、当世、時に当たつて謗法の人々国々に

じゅうまん うえ こくしゆすで だいいち ひぼう ひと とき
充滿せり。その上、國主既に第一の誹謗の人たり。この時、
この重罪を消さずば、いずれの時をか期すべき。日蓮が
小身を日本国に打ち覆つてののしらば、無量無辺の邪法の
四衆等、無量無辺の口をもつて一時に訾るべし。その時に
國主は、謗法の僧等が方人として日蓮を怨み、あるいは頸を
刎ね、あるいは流罪に行うべし。度々かかること出来せ
ば、無量劫の重罪一生の内に消えなんと謀りたる大術、
少しも違うことなく、かかる身となれば、所願も満足なる
べし。

しかれども、凡夫なれば、ややもすれば悔ゆる心有りぬ
べし。日蓮だにもかくのごとく侍るに、前後も弁えざる
にちれん によにん はべ ぜんご わきま
女人なんどの、各 仏法を見ほどかせ給わぬが、いか程か
にちれん おののおのぶっぽう み ほど たま 何
日蓮に付いてくやしとおぼすらんと心苦しかりしに、案に
にちれん こうじょう おんこころざし
相違して、日蓮よりも強盛の御 志 どもありと聞こえ
にちれん ただごと おも こころざし
候は、ひとえに只事にあらず。教主釈尊の各の御心に
にちれん ただごと おも きょうしゅしゃくそん おののおの みこころ
入り替わらせ給うかと思えば、感涙押さえ難し。妙楽大師、
しゃく い おも かんるいお がた まつだい みょうらくだいし
釈して云わく 〈記の七〉「故に知んぬ、末代の一時に聞く
しゃく い おも き しち ゆえ し いちじ
ことを得て、聞き已わつて信を生ずることは、事、すべか
しん しょう
じ

しゅくしゅ とううんぬん い ぐ に うんぞう
らく宿種なるべし」等云々。また云わく「弘の一」「運、像
まつあ まこと あ がた しんもんみ むかしみょういんう
末に在つて、この真文を曇る。宿妙因を殖うるにあらざ
れば、實に値い難しとなす」等云々。
とううんぬん じじゅうよねん
妙法蓮華經の五字をば、四十余年これを秘し給うのみに
しゃくもんじゅうしほん
あらず、迹門十四品になおこれを抑えさせ給い、寿量品に
じじゅりょうほん
して本果本因の蓮華の二字を説き顕し給う。この五字をば、
おさたまひたも
ほとけもんじゅふげんみろくやくおうとう ふぞくたま
仏、文殊・普賢・弥勒・藥王等にも付囑せさせ給わず。地涌
じょうぎょうぼさつむへんぎょうぼさつじょうぎょうぼさつあんりゆうぎょうぼさつとう
の上行菩薩・無辺行菩薩・淨行菩薩・安立行菩薩等を
ふぞくたも
寂光の大地より召し出だして、これを付囑し給う。

ぎしき

ごと

ほうじょうせかい

たほうによらい

だいち

しつぽう

儀式ただ事ならず。宝淨世界の多宝如来、大地より七宝

とう じよう ゆげん

たも

さんせんだいせんせかい

ほか

の塔に乗じて涌現せさせ給う。三千大千世界の外に

しひやくまんおくなゆた

こくど きよ

たか

ごひやくゆじゅん

ほうじゅ じん

四百万億那由他的の國土を淨め、高さ五百由旬の宝樹を尽

いつせんどう

う

なら

ほうじゅいつばん

もと

ごゆじゅん

しし

ざ

一箭道に殖え並べて、宝樹一本の下に五由旬の師子の座を

し なら

じっぽうふんじん

ほとけ

きた

ざ

たも

敷き並べ、十方分身の仏ことごとく來り坐し給う。また

しゃかによらい

くえ ぬ

ほうとう ひら

たほうによらい

なら

たも

釈迦如来は、垢衣を脱いで宝塔を開き、多宝如来に並び給う。

たと

せいてん にちがつ

なら

ほうとう

ひら

たいしゃく

ちようしようおう

譬えば、青天に日月の並べるがごとし。帝釈と頂生王と

ぜんほうどう

いま

かい

もんじゅとう

たほう

かんのんとう

の善法堂に在すがごとし。この界の文殊等、他方の觀音等、

じっぽう

こくう

うんじゅう

ほし

こくう

じゅうまん

十方の虚空に雲集せること、星の虚空に充満するがごと

とき

ど

けごんぎょう

しちしょはちえ

じつぼうせかい

だいじょう
るしゃなぶつ
でし
ほうえ
くどくりん

こんごうどう
こんごうぞうとう

台上の盧舍那仏の弟子、法慧・功德林・金剛幢・金剛藏等

じつぼうせつど
じんてんじゅ

だいぼきつうんじゅう

ほうどう

だいほうぼう

の十方刹土の塵点数の大菩薩雲集せり。方等の大宝坊
うんじゅう
ぶつぼさつ
はんにやきよう

せんぶつ

しゆばだい

たいしやくとう

だいにちきよう

雲集の仏菩薩、般若經の千仏

こんごううちょうきよう

さんじゅうしちそんとう

だいにちきよう

の八葉九尊の四仏四菩薩、金剛頂經の三十七尊等、

ねはんぎょう
くしなじょう
しゅうえ

たま

じつぼうほうかい

ぶつぼさつ

涅槃經の俱尸那城へ集会せさせ給いし十方法界の仏菩薩を

もんじゅ

みろくとうたが

けんち

おんものがたり

ば、文殊・弥勒等互いに見知して御物語これありしかば、

だいぼさつ
しゅつし
ものな

み
そらう

これらの大菩薩は出仕に物狎れたりと見え候。

いま

しほさつい

たま

のち

しゃかによらい

くだい

今この四菩薩出でさせ給いて後、釈迦如来には九代の

ほんし さんぜ ほとけ おんはは

もんじゅしりぼさつ いつしおう

本師、三世の仏の御母にておわする文殊師利菩薩も、一生
ほしょ かく ほさつ あ もの

補処とののしらせ給う弥勒等も、この菩薩に值いぬれば物
とも見えさせ給わず。譬えば、山がつが月卿に交わり、猿猴
しし ざ つら

が師子の座に列なるがごとし。

ひとびと め

みょうほうれんげきよう

ごじ

ふぞく

たま

この人々を召して妙法蓮華経の五字を付囑せさせ給い

ふぞく

じゅうじんりき

げん

たも

しゃか

こうちゅうぜつ

き。付囑もただならず、十神力を現じ給う。釈迦は広長舌
しきかい いただき つ たま しょぶつ

を色界の頂に付け給えば、諸仏もまたまたかくのごとく、

しひやくまんおく なゆた

こくど

こくう

しょぶつ

おんした

しゃつこう

四百万億那由他の国土の虚空に、諸仏の御舌、赤虹を

ひやくせんまんおくなら

じゅうまん

百千万億並べたるがごとく充满せしかば、おびただしか

夥

りしことなり。かくのごとく不思議の十神力を現じて、
結要付囑と申して、法華経の肝心を抜き出だして四菩薩に
譲り、「我が滅後に十方の衆生に与えよ」と懇懃に付囑し
て、その後また一つの神力を現じて、文殊等の自界他方の
菩薩・二乗・天・人・龍神等には、一經乃至一代聖教を
ば付囑せられしなり。

本より影の身に随つて候ようにつかせ給いたりし
迦葉・舍利弗等にも、この五字を譲り給わず。これはさて
おきぬ、文殊・弥勒等には、いかでか惜しみ給うべき。器量

なくとも、嫌い給うべからず。方々不審なるを、あるいは
他方の菩薩はこの土に縁少なしと嫌い、あるいはこの土の
菩薩なれども娑婆世界に結縁の日浅し、あるいは我が弟子
なれども初発心の弟子にあらずと嫌われさせ給うほどに、
四十余年ならびに迹門十四品の間は、一人も初発心の
御弟子なし。この四菩薩こそ、五百塵点劫より已來教主
釈尊の御弟子として、初発心よりまた他仏につかずして、
二門をもふまざる人々なりと見えて候。天台云わく「た
だ下方の發誓のみを見たり」等云々。また云わく「これ我が

弟子、応に我が法を弘むべし」等云々。妙樂云わく「子、
父の法を弘む」等云々。道暹云わく「法これ久成の法なる
に由るが故に、久成の人付す」等云々。この妙法蓮華経
の五字をば、この四人に譲られ候。

しかるに、仏の滅後、正法一千年、像法一千年、末法に
入つて二百二十余年が間、月氏・漢土・日本・一闍浮提の
内にいまだ一度も出でさせ給わざるは、いかなることにて
あるらん。正しくも譲らせ給わざりし文殊師利菩薩は、仏
の滅後四百五十年までこの土におわして大乗經を弘めさ

せ給い、その後も香山・清涼山より度々來つて大僧等と成
つて法を弘め、藥王菩薩は天台大師となり、觀世音は南岳
大師と成り、弥勒菩薩は傳大士となれり。迦葉・阿難等は仏
の滅後二十年・四十年、法を弘め給う。嫡子として譲られ
させ給える人のいまだ見えさせ給わず。

にせんにひやくよねん あい d きょうしゅしゃくそん えぞう もくぞう けんおう せいしゅ
二千一百余年が間、教主釈尊の絵像・木像を賢王・聖主
は本尊とす。しかれども、ただ小乘・大乘、華嚴・涅槃・
觀經・法華經の迹門・普賢經等の仏、真言の大日經等の
仏、宝塔品の釈迦・多宝等をば書けども、いまだ寿量品の

しゃくそん さんじ しょうじや

はか

釈尊は山寺・精舎にましまさず。いかなることとも量り

がたし。釈迦如来は「後の五百歳」と記し給い、正像二千年

をば法華経流布の時とは仰せられず。天台大师は「後の

五百歳、遠く妙道に沾わん」と未来に譲り、伝教大师は

「正像やや過ぎ已わつて、末法はなはだ近きに有り」等と

書き給いて、像法の末はいまだ法華経流布の時ならずと、我

と時を嫌い給う。されば、おしさかるに、地涌千界の大菩薩

は、釈迦・多宝・十方の諸仏の御譲り・御約束を空しく黙止

して、はてさせ給うべきか。

果

たも

か
とき
たま
ぞうほう
まつ
す
お
まつぽう
ちか
あ
とう

推量

じゅせんがい

だいぼさつ

しゃか
たほう
じっぽう
しょぶつ
おんゆず
おんやくそく
むな
もだ

げてん けんじん とき ま ほととぎす もう ちくちよう うづき さつき
外典の賢人すら時を待つ。郭公と申す畜鳥は卯月・五月
に限る。この大菩薩も末法に出ずべしと見えて 候。いか
んと候べきぞ。瑞相と申すことは、内典・外典に付いて、
必ず有るべき事の先に現するをいうなり。「蜘蛛かかつて
喜び事來り、鴉鳴いて客人来る」と申して、小事すら
験先に現ず。いかにいわんや大事をや。されば、法華経序品
の六瑞は一代超過の大瑞なり。涌出品は、またこれには似る
べくもなき大瑞なり。故に、天台云わく「雨の猛きを見て
は竜の大きなることを知り、華の盛んなるを見ては池の深
りゆう おお
はな さか
み
いけ ふか

「きことを知る」と書かれて候。妙楽云わく「智人は起を
し 知り、蛇は自ら蛇を知る」と云々。

今、日蓮もこれを推して智人の一分とならん。去ぬる正嘉
元年太歳丁巳八月二十三日戌亥の刻みの大地震と、文永
元年太歳甲子七月四日の大彗星、これらは仏の滅後
にせんにひやくよねん あいだ

二千一百余年の間、いまだ出現せざる大瑞なり。この
だいぼさつ だいほう なま しゅつけん たも

大菩薩のこの大法を持つて出現し給うべき先瑞なるか。
しゃく いけ じよう なみ せんずい

尺の池には丈の浪たたず、驢吟するに風鳴らず。日本国
まつりごとみだ ばんみんなげ かぜな にほんこく

政事乱れ、万民歎くによつては、この大瑞現じがたし。誰
だいすいげん たれ

か知らん、法華經の滅・不滅の大瑞なりと。

にせんよねん

あいだ

あくおう

ばんにん

むほん

もの

しょにん

二千余年の間、魔王の万人に讐らるる、

謀叛の者の諸人

にじゅうよねん

にあだまるる等。日蓮が失もなきに、高きにも下きにも

罵詈・毀辱、刀杖・瓦礫等、ひまなきこと二十余年なり。

隙

唯事にはあらず。過去の不輕菩薩の、威音王仏の末に多年の

間罵詈せられしに相似たり。しかも、仏、彼の例を引いて云わく「我が滅後の末法にもしかるべき」等と記せられ

て候に、近くは日本、遠くは漢土等にも、法華經の故に

かかることが有りとはいまだ聞かず。人は悪んでこれを云わ

わ
い
じさん
に
い
ぶつご
むな
けんじん
そうちう
こう
おも
ほう
かる
み
か
とが
わ
れ
す。我とこれを云わば自讚に似たり。云わば、仏語を空し
くなす過あり。身を軽んじて法を重んずるは賢人にて候
なれば申す。

堕
に おつ。 これは いまだ 渴仰せず。
かつごう
ふびん
ふびん
知らず、 無数劫を や経ん
し
むしゅこう
へ

うたが
い
しょうか
だいじしんとう
ぶんおう
い
元年太歳庚申七月十六日、宿屋入道に付けて故
最明寺入道殿へ奉るところの勘文・立正安国論には、
法然が選択に付いて日本國の仏法を失う故に、天地瞋り
をなし、自界叛逆難と他國侵逼難起ころべしと勘えたり。
ここには、法華經の流布すべき瑞なりと申す。先後の相違こ
れ有るか、いかん。

答えて云わく、汝能くこれを問えり。法華経の第四に云
わく「しかもこの経は、如來の現に在すすらなお怨嫉多し。
いわんや滅度して後をや」等云々。同第七に「いわんや滅度
して後をや」を重ねて説いて云わく、「我滅度して後、後の
五百歳の中、閻浮提に広宣流布せん」等云々。仏の滅後の
多怨は、後の五百歳に妙法蓮華経の流布せん時と見えて
候。次下にまた云わく「惡魔・魔民・諸天・龍・夜叉・
鳩槃茶等」云々。行滿座主、伝教大師を見て云わく「聖語
朽ちず、今この人に遇えり。我が披閱するところの法門、

にほんこく　あじやり　じゅよ　とううんぬん　いま

日本國の阿闍梨に授与す」等云々。今もまたかくのことし。

まつぼう　はじ　みょうほうれんげきょう　ごじ　るふ　にほんこく　いつさい

末法の始めに妙法蓮華經の五字を流布して、日本國の一切

しゅじょう　ほとけ　げしゅ　かいにん　とき　れい　げによ　おうしゅ

衆生が仏の下種を懷妊すべき時なり。例せば、下女が王種

かいにん　もうもう　によいか

を懷妊すれば、諸の女瞋りをなすがごとし。

下賤の者に王

ちよう　たま　じゅよ　だいなんきた

頂の珠を授与せんに、大難來らざるべしや。「一切世間に怨

多くして信じ難し」の経文これなり。

ねはんぎょう　い　しよういん　なん　いた　たこく

涅槃經に云わく「聖人に難を致せば、他國よりその国を

おそ　うんぬん　にんのうきょう　くに

襲う」と云々。仁王經もまたまたかくのことし「取意」。日蓮

責　てんち　しほう　たいさいあめ

をせめて、いよいよ天地・四方より大災雨のことくあり、泉

降　いづみ

湧

なみ

よ
きた
くに
だいこうちゅう

のごとくわき、浪のごとく寄せ来るべし。國の大蝗虫たる
諸僧等・近臣等が日蓮を讒訴する、いよいよ盛んならば、
大難ますます来るべし。帝釈を射る修羅は、箭還つて己が
眼にたち、阿那婆達多龍を犯さんとする金翅鳥は、自ら火
を出だして自身をやく。法華經を持つ行者は、帝釈・
阿那婆達多龍に劣るべきや。

章安大師云わく「仏法を壞乱するは、仏法の中の怨なり。
慈無くして詐り親しむは、即ちこれ彼が怨なり」等云々。
また云わく「彼がために惡を除くは、即ちこれ彼が親なり」

とううんぬん にほんこく いつさいしゅじょう ほうねん しゃへいかくほう ぜんしゅう
きょうげべつでん お きょうげん たぶら
等云々。日本國の一切衆生は、法然が捨閑閣拋と禪宗が
教外別伝との誑言に誑かされて、一人もなく無間大城に
墮つべしと勘えて、國主・万民を憚らず大音声を出だし
て二十余年が間よばわりつるは、竜逢・比干の直臣にも
劣るべきや。大悲千手觀音の一時に無間地獄の衆生を取り
出だすに似たるか。火の中の數子を父母が一時に取り出だ
さんと思うに、手少なれば慈悲前後有るに似たり。故に、
千手・万手・億手ある父母にて在すなり。爾前の經々は
一手・二手等に似たり。法華經は「一切衆生を化して、皆
いつしゆ まんじゅ おくしゅ ふぼ いま に せんじゅ おも てすぐ
にしゅとう に ほけきょう け みな

ぶつどう

い

仏道に入らしむ」と。無数手の菩薩これなり。

にちれん

ほけきょう

しょうあん

しゃく

にほん

日蓮は、法華經ならびに章安の釈のことくならば、日本

いっさいしゅじょう

じひ

ふぼ

てんたか

みみ利

國の一切衆生の慈悲の父母なり。天高けれども耳とければ

き

たも

じあつ

まなこはや

ごらん

聞かせ給うらん。地厚けれども眼早ければ御覽あるらん。

てんちすで

し

いっさいしゅじょう

ふぼ

めり

天地既に知ろしめしぬ。また一切衆生の父母を罵詈するな

ふぼ
るざい

くに

りょうさんねん

あいだ
らんせい

り、父母を流罪するなり。この國、この両三年が間の乱政

せんだい

ほう
す

そうちら

ひも

こうよう

おお

つか

そうちらう

かんるい
お

は、先代にもきかず、法に過ぎてこそ候え。

ひ

す

そうちら

そもそも悲母の孝養のこと仰せ遣わされ候。感涙押さ

がた

むかし
げんじゅうとう

ごどう

ごぐん

いせい

たにん

きょうだい

え難し。昔、元重等の五童は五郡の異姓の他人なり。兄弟

の契りをなして互いに相背かざりしかば、財三千を重ねたり。「我ら、親というものなし」と歎いて、途中に老女を儲けて母と崇めて、一分も心に違わずして二十四年なり。母たちまちに病に沈んで物いわす。五子、天に仰いで云わく「我ら、孝養の感無くして、母もの云わざる病あり。願わくは、天、孝の心を受け給わば、この母に物いわせ給え」と申す。その時に、母、五子に語つて云わく「私は本これ大原の陽猛というものの女なり。同郡の張文堅に嫁す。文堅死にき。我に一りの兒あり。名をば烏遺と云いき。彼が七歳の

時、乱に值つて行く処をしらず。汝等五子に養われて
二十四年、このことを語らず。我が子は胸に七星の文あり。
右の足の下に黒子あり」と語り畢わつて死す。

五子、葬りをなす途中にして、国令の行くにあいぬ。彼
の人、物記する囊を落とせり。この五童が取れるになして
禁め置かれたり。令、来つて問うて云わく「汝等はいづく
の者ぞ」。五童、答えて云わく。上に言えるがごとし。その
時に、令、上よりまろび下りて、天に仰ぎ、地に泣く。五人
の縄をゆるして我が座に引き上せて、物語りして云わく「我

はこれ烏遺なり。汝等は我が親を養いけるなり。この
二十四年の間、多くの楽しみに値えども、悲母のことをの
み思い出でて楽しみも楽しみならず」。乃至、大王の見参に
入れて五県の主と成せりき。他人集まつて他の親を養うに、
かくのことし。いかにいわんや、同父・同母の舍弟妹女等が
ゆうゆうたるを顧みば、天もいかでか御納受なからんや。
淨藏・淨眼は法華經をもつて邪見の慈父を導き、
提婆達多は仏の御敵、四十余年の經々にて捨てられ、
臨終悪しくして大地破れて無間地獄に行きしかども、

ほけきょうう　め　かえ　てんのうによらい　き
法華經にて召し還して天王如來と記せらる。阿闍世王は父
を殺せども、仏涅槃の時、法華經を聞いて阿鼻の大苦を免
れき。

ほだけねはん　とき　ほけきょう　き　あ　び　だいく　まぬか
さどのくに　ちくしょう
例せば、この佐渡国は畜生のことくなり。また法然が
弟子、充满せり。鎌倉に日蓮を惡みしより百千万億倍に
て候。一日も寿あるべしとも見えねども、各　御　志　あ
る故に今まで寿を支えたり。これをもつて計るに、法華經
をば、釈迦・多宝・十方の諸仏・大菩薩、供養・恭敬せさ
せ給えば、この仏菩薩は、各々の慈父・悲母に、日々夜々、
たま
ゆえ　いま　いのち　いのち　さき
しゃか　たほう　じっぽう　しょぶつ　だいぼさつ　くよう　くぎよう
ぶつぼさつ　おのおの　じ　ぶ　ひ　も
ひ　び　よ　よ

じゅうにとき
十二時にこそ告げさせ給わめ。當時、主の御おぼえのいみ
じくおわするも、慈父・悲母の加護にやあるらん。
兄弟も兄弟とおぼすべからず、ただ子とおぼせ。子な
りとも梟鳥と申す鳥は母を食らう。破鏡と申す獸の父を
食らわんとかがう。わが子・四郎は父母を養う子なれど
も、悪しくばなにかせん。他人なれども、かたらぬれば命
にも替わるぞかし。舍弟らを子とせられたらば、今生の
方人、人目申すばかりなし。妹らを女と念わば、などか
孝養せられざるべき。

なが

いちにん

とぶら
ひと

思

これへ流されしには一人も訪う人もあらじとこそおぼ
せしかども、同行七・八人よりは少なからず。上下のかて
も各の御計らいなくば、いかがせん。これひとえに、
法華経の文字の各の御身に入り替わらせ給いて御助けあ
るとこそ覚ゆれ。

いかなる世の乱れにも各々をば法華経・十羅刹助け給え
と、湿れる木より火を出だし、乾ける土より水を儲けんが
ごとく、強盛に申すなり。事繁ければ、とどめ候。

日蓮 花押

しじょうきんごどのごへんじ
四条金吾殿御返事